

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 30 年 6 月 19 日現在

機関番号：14401

研究種目：基盤研究(B) (特設分野研究)

研究期間：2015～2017

課題番号：15KT0044

研究課題名(和文) 歴史遺産と未来共生 - 武力紛争下の文化財保護・回復政策を通じた深層の平和構築の推進

研究課題名(英文) Historical Heritage and Future-oriented Coexistence: Advancing Deeper-level Peacebuilding through Protection and Recovery of Cultural Properties under Armed Conflicts

研究代表者

星野 俊也 (Hoshino, Toshiya)

大阪大学・国際公共政策研究科・招へい教授

研究者番号：70304045

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,800,000円

研究成果の概要(和文)：武力紛争下で破壊や攻撃の危機にある歴史的な文化遺産を人類共通の未来共生に向けた「歴史遺産」として保護する「深層の平和構築」政策の推進のための条件を学際的に研究した。特に、文化遺産の「遺産化」を可能とする非政治化・脱過激化・経済利益の分配・社会倫理的な多元主義の推進に向けた政治プロセスと教育プログラムについて検討した。

研究成果の概要(英文)：The study explored the conditions under which we can promote what we call "deeper-level peacebuilding" which enables people to protect historic monuments and properties as common human, future-oriented "historic heritages." This interdisciplinary study examined both political process and educational programs that would advance "heritagization" of cultural monuments and properties by de-politicization, de-radicalization, distribution of economic interests, and socio-ethical pluralization.

研究分野：国際関係論

キーワード：文化財保護 深層の平和構築 未来共生

1. 研究開始当初の背景

(1) 科学技術の進展やグローバル化の拡大によって人類の統合と共生の進捗が期待された 21 世紀の世界では、残念なことにむしろ分裂と対立が拡大しているように見える。本研究開始時の世界は、特にイスラム原理主義の武装勢力 IS が現代の国境線を否定し、中世の「カリフ国家」の再興を目指し、その過程で多くの貴重な世界遺産級の文化財や遺跡が次々と破壊される事件が発生した。振り返ると、その傾向は、2001 年 2 月、世界に大きな衝撃を与えたターリバーンによるバーミヤン遺跡の石仏爆破事件でも見出すことができた。

(2) 武力紛争下において、人々の歴史や精神や魂の深層につながるアイデンティティを体現する文化財が、それゆえに破壊や攻撃の対象となる事件が多発するなか、そうした動きを食い止め、人々が文明・文化・民族等の差異を乗り越え、相互尊重と多様性の受容による共生社会の形成に向けた戦略と手段が最も求められる時代にあるとの認識のもの、本研究は構想された。

(3) 本構想は、研究代表者が、歴史的な文化遺産の保護に全身全霊で臨んだ故・平山郁夫画伯（文化遺産国際協力コンソーシアム初代会長）の遺志を汲む国際シンポジウム「文化遺産保護は平和の礎を作る」の企画・運営に深く参画したことも契機としている。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、歴史遺産が人々の中の憎悪・敵対・否定の象徴として破壊や攻撃の対象となる一方、これらの人々が未来志向で多様性を相互に尊重し合い、受け入れ、高め合う共生（＝未来共生）を実現するツールに転換するにはどのような要素が求められるのかを研究することを目的とする。

(2) 武力紛争の影響を受ける人々が互いの歴史遺産の保護を通じて未来共生社会の構築に向かうプロセスを「深層の平和構築」と捉え、理論と事例の両面から研究することも本研究の目的とする

3. 研究の方法

(1) 歴史遺産を保護・回復するプロセスが、紛争下ないしポスト紛争社会に持続的な平和をもたらすための平和構築支援においては、単に制度面のみならず人々の深層の心理や精神面にまで作用する重要な意義を有し、未来共生社会の形成の礎になりうる、との操作仮説を打ち立て、検証する。

(2) 理論と事例の研究にあたっては、国際関係論、国際安全保障論、文化財保存学、歴史学、倫理学、メディア学、芸術学などの知の統合を通じ、「深層の平和構築」実践に向けた方法論を見出す方法論をとった。

4. 研究成果

(1) 研究は理論と事例の両面から未来共生

を通じた深層の平和構築」というプロセスを仮定し、各自の研究においては、歴史遺産の保護がどのように深層レベルで平和構築に結びつけられ得るのかについて検討を続け、各自が専門とする地域の事例間の比較を行った。事例の分析は、イスラエル・パレスチナ、セルビア・コソボ、トルコ、キプロス、タイ、カンボジアなど多方面で行われた。

その中で明らかになったのは、文化遺産保存や国連教育科学文化機関（UNESCO）の活動などで一般に先進的とされる欧州の事例において、遺跡が異なる民族や文化のアイデンティティを表象する文脈で破壊や攻撃の対象とされる傾向がみられたのに対し、紛争や虐殺の後遺症が現在も残るカンボジアの事例で、アンコールワット遺跡が民族や宗教の分断を超えるカンボジア人全体の統合と共生の象徴とされてきた現実であった。イスラム原理主義による暴力的過激主義はこの両極の間に位置する可能性がある。これは、現行の欧米主導の世界秩序が中世「カリフ制」の崩壊につながったことから、暴力的な手段を用いても秩序の再編を求めようとする動きであり、その結果として文化財の否定という象徴的に表れたケースと考えられる。

(2) 文献調査や複数の事例研究を通じた研究会合のなかから本プロジェクトとして、今回、新たな分析概念として歴史的な文化財・遺跡の「遺産化 (heritagization)」概念を打ち出すこととした。

我々が定義する「遺産化」とは、歴史的な文化財や遺跡が後世の政治や人の手によって特定の意味を付与された「遺産」として再解釈されるプロセスを指す。つまり、本研究の当初は、「歴史遺産」という用語を比較的自由に使ってはいたが、一つの文化財や遺跡はそのままでは自動的に遺産として認識されるわけではなく、それぞれの歴史の文脈において人々が政治的な意味を付与することによって特定の非物質的なレガシー（遺産）認識を含む主に物理的なヘリテージ（遺産）財とされるプロセスである。本研究では、「遺産化」のいくつかのパターンを分ける要因について検討を加えてきた。

現段階での結論として、第一に文化財や遺跡そのものが持つ 国内的な文脈や地位、国際的な知名度や地位、経済的な価値、第二に文化財や遺跡の存在する国の アイデンティティをめぐる政治的対立の有無や深刻さ、異なる文化集団間の経済的な格差、遺跡を利用しようとする政治エリートの有無、さらに第三にその社会の 多様性やそれを包含する成熟度、遺跡に携わる「人」の育成度合い、などがこの「遺産化」プロセスを大きく左右する要因として特定することを導き出した。そして、こうした「遺産化」のプロセスを通じて対立ではなく相互尊重を見出す場合に「未来共生」秩序が形成されるとの仮説を立てることとなった。

(3) さらに、本研究では、これらの分析の

精緻化と、未来共生社会の形成に向けた教育プログラムへの応用を次のステップの作業とした。なぜなら、次世代が過去の相互に否定的な歴史教育を改め、より相互理解と多様性への受容と多文化・多様性の建設的な理解と尊重に基づく新社会秩序の形成を促すことこそが平和構築の礎を築くことにつながるからである。

具体的には、対立関係にある人々が、文化財や遺跡を相互に共有する「歴史遺産」として認識し、破壊・争奪・遺棄する姿勢から修復・共治・保全につとめる関係に移行するのは、政治的効果（歴史遺産の政治化ではなく非政治化）、経済的効果（歴史遺産の経済効果の独占ではなく適切な分配）、社会倫理的効果（歴史遺産を否定する独裁ではなく、多元主義を容認する脱専制的な姿勢の確保）が重要になることを指摘した。



そして、歴史遺産の非政治化・脱独占、脱専制の方向に人々を動かす作用のなかにアート、教育、メディアの役割がいかに大きいかも本研究ではあきらかにされた。

(4) なお、本研究の研究協力者の石澤良昭は、カンボジアのアンコール遺跡研究の第一人者であり、半世紀以上にわたり同遺跡の修復に尽力し、カンボジア人が文化遺産に対する誇りを取り戻すことに寄与したことを受賞理由に 2017 年のマグサイサイ賞（アジアのノーベル賞と呼ばれる権威ある賞）を受賞したが、その業績を記念するレクチャーでは、本共同研究の成果を踏まえ、カンボジアでのアンコール遺跡の存在は、歴史遺産と未来共生に関わる「深層の平和構築」の事例と位置づけている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

星野俊也、民族の『年代記』と『聖域』、そして『未来』：タイ深南部を訪ねて考えたこと、ASIA PEACEBUILDING INITIATIVES (オンラインジャーナル)、2017

<http://peacebuilding.asia/hoshino2017/>

石澤良昭、歴史からのメッセージ 内戦中に現地に入り、失われた人材を養成、坂の上ミュージアム通信、第 30 巻、2017、pp.19-22.

〔学会発表〕(計 6 件)

石澤良昭、建学の精神をアジアの現場で実

践 人を育てアンコールを守る 25 年 救うのは遺跡も人間も (Rebuilding People's Identity and Cultural Treasure: Lessons from the Sophia University)、マグサイサイ賞受賞記念講演会(招待講演)、2017 年。

Hawkins, Virgil, The use of conflict death tolls in the media: An indicator of scale or a tool in generating attention?, International Peace Research Association (IPRA)、Bintumani Conference Centre (Freetown, Sierra Leone)、2017 年 11 月 29 日。

原本知実、政治的要因による危機にある文化財 - 北キプロスの事例、政治的課題を抱える文化財の保護に関する研究会、2017 年 3 月 10 日

眞嶋俊造、武力紛争下における文化遺産の保護と回復を巡る応用倫理的検討、応用哲学学会第 8 回年次研究大会、2017 年 02 月 14 日

Hawkins, Virgil, How Japan sees Africa: A view from the mass media, Freestate University PolHisSoc Seminar, 2017 年

中内政貴、The work of memories in peacebuilding、Historical Heritage and Security Conference, 2017.

〔図書〕(計 1 件)

石澤良昭、鶴間和幸、伊東利勝、岡田康博、高橋龍三郎、四柳嘉章、NHK 出版、アジア巨大遺跡 兵馬俑・パガン・縄文・アンコール、2016。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

星野 俊也 (HOSHINO, Toshiya)

大阪大学・国際公共政策研究科・招へい教授

研究者番号：70304045

(2) 研究分担者

石澤 良昭 (Ishizawa, Yoshiaki)

上智大学・アジア人材養成研究センター・教授

研究者番号：10124861

日高 健一郎 (Hidaka, Kenichiro)

大阪大学・国際公共政策研究科・招へい教授

研究者番号：30144215

原本 知実 (Haramoto, Tomomi)

大阪大学・国際公共政策研究科・招へい研究員

研究者番号：20558100

中内 政貴 (Nakauchi, Masataka)

大阪大学・国際公共政策研究科・准教授

研究者番号：10533680

眞嶋 俊造 (Majima, Shunzo)
広島大学・総合科学研究科・准教授
研究者番号：50447059

ホーキンス バージル (Hawkins, Virgil)
大阪大学・国際公共政策研究科・准教授
研究者番号：10511040

富田 大輔 (Tomita, Daisuke)
追手門学院大学・社会学部・准教授
研究者番号：70623809